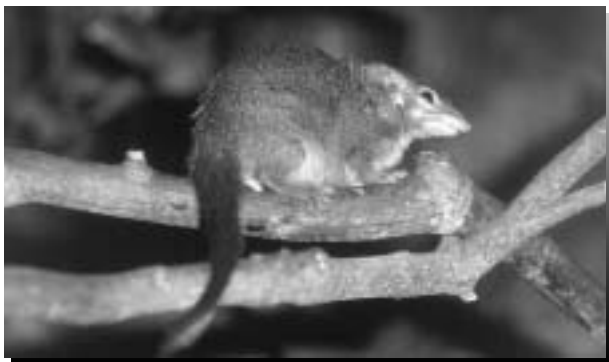


飽くなき挑戦者

大森山動物園長

小松 守



▲原始的霊長類？ツパイ（現在はツパイ目に分類）

私たちの先祖であるサルたちは6～7,000万年以上もの大昔、原始的な食虫類の仲間から進化したと言われている。

原始食虫類はすべての哺乳動物の始まりであるともされているが、当時の彼らは茂みの中で日中は恐竜から身を隠し、夜に歩き回って虫を捕まえて暮らしていた。現存するトガリネズミなどの食虫類は昔の姿と大差ないようだ。

皆が地面でしのぎを削って虫集めに奔走している中、一部変わり者が（どこにでもいるが…）大いなる勇気をもって地面を後にし、画期的にも樹上という空間に果敢に挑んだのである。地上の活動に慣れてきた原始的な食虫類にとって、樹上という生活空間は決して居心地のいい場所ではなかったであろう。

しかし、彼らは樹上での生活を確固たるものにしようと飽くなき挑戦をし続けた。木の枝を握れるように手指に器用さを身につけ、また、何度も何度も枝から枝へ跳び移れるように練習もしたであろう。その結果、挑戦者たちの手指は親指と他の四指が向き合うようになり、また両目は顔の正面に付き両眼視が可能となるなど体つきはしだいに樹上生活へ適応し始め、地上で生活するこれまでの仲間とは明らかに違った能力も身につけるようになった。

新天地に挑んだものたちへ神様（自然）はご褒美として、地上とは違い敵の少ない安全な生活空間と大好物の餌をたくさん用意してくれた。好物の虫を探すことで、付録として甘い果実も発見することもできた。新天地の樹上生活は苦労した挑戦者だけに与えられた楽園であった。この挑戦者がまさに私たちの人類のご先祖さんであった。豊かな暮らしは挑戦者たちへ旺盛な探求心もかき立てた。

ところで、地上に残った原始的な食虫類だって、

生き抜くために決して何の努力も払わなかった訳ではなかった。植物を好きになった仲間たちはしだいに体を大型化させ同時に蹄も備え、ついにはウマやキリンあるいはゾウの如き巨漢へと進化した。肉食を選んだ仲間はライオンやトラなどのしなやかな体と強力な牙や強い腕っ節を持った究極のハンターへと変貌を遂げた。あるいは水にすむクジラなどは魚のような姿になった。どれもこれも哺乳動物の多様な適応を教えてくれる特徴的な姿形である。しかし、彼らが行き着いたところは進化の袋小路であり、後戻りできない特異な容姿でもあった。

それでは樹上へと進出した飽くなき挑戦者たちの容姿はどうであったのか。地上で特徴的な生活を選択した多くの動物たちと比較して、その姿は意外なほど食虫類が持つ元の容姿をそれほど損なうことなく生き続けてきたのであった。

挑戦者たちが獲得したのびのびした豊かな樹上空間は、先祖の原型を無理に変える必要はなかった。体の各機能をバランスよく関連させながら発達させ、それは高い知能の発達へと繋がり、高い知能はサルの豊かな個性へと発展し、その集まりである群は他動物に類を見ない複雑な社会へと変貌を遂げた。挑戦者たちをのみ込んだ渦はサルの進化と共に勢いを増すようになり、それはあたかも加速度的に変化する私たち人間の生活環境、社会環境にも似ているような気がする。

ところで、飽くなき挑戦者たちが袋小路に入らず、頑なに基本的スタイルを守り続けてきたことは、結果的に今の私たち人への進化に結びついたわけであるが、このことは人間という極めて頭でっかちで特異な動物を創り上げてしまったというパラドックス的展開をも生み出したのである。嗚呼、挑戦者たちは何処へと向かうのであろうか。



▲サル山の二ホンザル